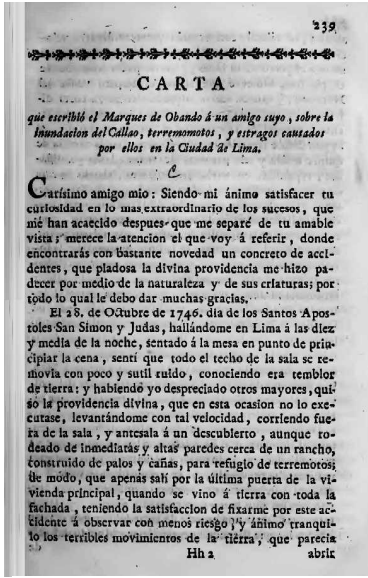


論稿 六ノ二

ペルー地震一七四六年

第一章 スペイン海軍オバンド將軍の地震書簡

第二章 イエズズ会ロザーナ神父の震災報告



—86—

ta Ciudad. El Callao y el Pueblo de Dicap.—Habrán perecido sobre mil personas de todo género de estados, en los terremotos referidos. Su Divina Magestad se haya servido de haberles dado su santo reino Anon.

RELACION DEL TERREMOTO QUE ARRUINÓ Á LIMA É INUNDÓ AL CALLAO EL 28 DE OCTUBRE DE 1746, ESCRITA POR EL PADRE PEDRO LOZANO DE LA COMPANIA DE JESUS.

El 28 de Octubre de 1746 como á las diez y media de la noche, se sintió en Lima un temblor de tierra, tan violento, que en menos de tres ó quatro minutos de duracion, ha sido enteramente arruinada la ciudad. Fué tan repentino el mal, que nadie tuvo el tiempo de ponerse en seguro: y fué tan universal el estrago, que nadie pudo evitar el peligro con la huida. Han quedado solamente en pie veinte y cinco casas, y sin embargo, por una proteccion particular de la providencia, de sesenta mil personas de que se componia la ciudad, no pereció mas que la duodécima parte, sin saber los que se vieron libres como salieron del peligro; y así miran la conservacion de sus vidas, como una especie de milagro.

Pocos ejemplos se hallan en las historias de un suceso tan lastimoso: y es difícil que la imaginacion mas viva pueda llenar la idea de semejante calamidad. Representese V. R. todas las iglesias demolidas, y generalmente arruinados los otros edificios. Veinte y cinco casas que resistieron el estremecimiento, quedaron tan maltratadas, que es preciso acabar de abatirlas. De las dos torres de la Catedral, la una cayó hasta la altura de la bóveda de la iglesia, la otra hasta el paraje adonde están las campanas; y lo demas que queda, está en muy mal estado: por que desajandose sobre la iglesia las dos torres, demolieron sus

第一章 スペイン海軍オバンド將軍の地震書簡

その古典的著作『地震の原因と観測に関する推論―なかでもリスボン大地震について』において自然学者ジョン・ミチェルは、地震発生の成因を究明・比較すべく、幾多の震災記録を点検した。なかで大航海時代以降に大陸で経験された巨大地震に注目し、スペイン領ペルーでの震災をつぎのように語る。「リマ、カヤオ、それらの隣接地域も六十年に二度地震でほぼ全壊して、倒壊せぬ建物は皆無に近く、その都度津波にも襲われた。当地における震災としてはこれらだけでなく、一五八二年から一七四六年までに激しい地震が十五以上、相当な震動は無数に生じたのである。」① とりわけ一七四六年のペルー地震は一六九二年のジャマイカ地震とともに、新大陸におけるとくに大規模な震災とされるが、その被災史料は後者のそれに比してもより僅少である。

そうしたなかで第一に枚挙すべき記録は、みずから地震と津波に遭遇し、救援活動に献身したスペイン海軍の総督フランシスコ・ジョゼ・オバンド侯爵の証言であろう。震災のさなかに綴られたこの文献は、スペインの文学者アントニオ・ヴァラダレスの編纂により一七八九年マドリッドで刊行された大部の史料集『週刊 古今にわ

① John Michell, *Conjectures concerning the Cause and Observation upon the Phenomena of Earthquake*.

Philosophical Transaction Vol. LI, Part II, 1760 London.

たる優れた執筆者による未刊の著作』第十六巻に収録され、二六頁の長文に及ぶ。なお、いま述べたミッチェルの著作にはこれなる証言への言及は見出されない。①

一六九三年スペイン西部のカセレスで生まれたオバンドは、フィリップ五世の治下十九歳に志願し、海軍の士官として造船と築港の技術をも学んだ。王妃イザベル・フェルネーゼに主導される膨張政策に沿って、一七三三年スペインはポーランド継承戦争へ介入し、ナポリとシチリアを版図に収める。この戦争でオバンドはブリンデイシ港の占領を労として爵位を授けられた。②

南米大陸の北西端カルタヘナ・デ・インディアスは、スペインから最初の寄港地であるとともに、リマあるいはバナマへの中継地として繁栄した。ここではペルー産出の金銀が輸出され、奴隷取引も営まれる。植民地争奪をめぐるジェイキンス耳戦争のさなか、一七四一年にイギリス艦隊は軍艦一二四艘をもってカルタヘナへ上陸し、市街の占領をも企てた。かねて外国勢力や私掠船から防衛すべく新大陸に派遣されたオバンドは、堅固な要塞を拠点とし、押し寄せる大軍の撃破に一翼を担った。この功績によって一七四三年彼はペルー副王領における艦隊司令長官に昇進し、二年後チリ暫定総督に推挙された。属領チリにおける在任は短期であったが、この間当地最

① Marques de Obande, *Carta a un amigo, sobre la Inadation de Callo, Terremoto, y estragos causados por ellos en*

la Ciudad de Lima. Antonio Valladares de Sotomayor, *Semanario Erudito, que comprehende varias Obras ineditas*,

tomos 16. Madrid, 1789. pp.239-264.

② Francisco José de Ovando, 1st Marquis of Brindisi. *Wikipedia*. online.

初の大学、サン・フィリッペ大学の創設に貢献する。ペルー大地震が発生したのは、オバンドがリマへ帰宅してほどなくであった。① 新大陸の制覇を堅持するスペイン海軍の前線に携わり、南米植民地行政の中樞に位置する人物の震災記録を以下に試訳する。

都市リマの地震と震災、およびカヤオにおける津波に関する友人宛書簡

フランシスコ・ジョゼ・オバンド侯爵

「オバンド侯爵の震災書簡 その一」

お別れした以後、余を襲った世にも数奇な出来事を篤学な貴君に語る。慈愛深き神が自然と被造物を通して余に体験させ給うた秘話の連鎖をお理解頂けば幸甚である。

一七四六年十月二八日聖シモンと聖グタイの祭日、夜の十時半リマにおいて余は食卓に就き、晚餐にかかるところ、微かな音が聞こえ、天井全体が揺れ始めた。震動だと直感し、神よ！この際同席の年長者に構わず、食事をやめてすぐさま立ち上がる。食堂から控室へと逃れ、障壁や石塀を避けて空地へと脱出した。その近くには地震から避難するため、丸太や葦で護られた牧場がある。大建築の末端で出口を脱するや、その正面全体が崩れ落ち、救われたこの思いで倒壊を凝視する。恐ろしくも大地が割れ始め、猙獰な獣が背中の

① Francisco José Ovando y Solís. *Real Academia De la Hispria. online.*

塵を払うように、小刻みに鋭く建物を揺ぶった。立居も難しく、大きな衝撃の波が北西から来るようである。余の就寝と夕食の場であった住居の土台と障壁がほぼ六分後に崩れた。そこではそれぞれの区画に老若男女が十四人ほど暮らすのである。中程度よりやや高層の建築で、これらの居住者も恩寵により死を免れたものの、相互に扶け合う余裕はなく、全面塵埃のなかで茫然とするのみであった。

激しい震動が中断すると、叫喚と嗚咽が耳を覆い、だれもが荒墟の迷路のなかで救いを求める。余もまた身内の全員を探し、被害は軽傷の黒人少年のみと知った。神慮に感謝して彼らを空地に集めて、余の身分を明かさぬよう命じ、応急の対処を指示する。灰燼の暗雲のもと全市にわたる阿鼻叫喚のなかで、明日の糧すら得られぬ身で、未曾有の破局に直面したのである。すぐさま余が憂慮したのは、だれにも供される予定の夕食ができないことである。激烈にして長時間の破局に陥り、食欲も失われた最中に、食べものの心配は奇異に映じようが、後日充分に理解頂いた。かかる災害に直面して、公衆のため全力を尽しえたことを、神に感謝する。危急の際で食器すら入手が難しく、ハンガリー製の湯飲み数個を食器棚に納めたことを思い出し、役に立てばとそれを取りに走らせた。こうした支援をさらに重ね、幸いにも労苦を感謝される。かくして頑強な身内三名を従えて、余は隣人たる跣足メルセナリア会も救援に向った。だが、ここではすべての障壁が崩れ落ち、大声で探しても応答がない。

物音ひとつない不気味な回廊の内部に敢えて踏み入ると、荒墟を護る聖器室管理員と奇しくも出会った。修道会一同はみな農園へ避難したと言うのである。サンタ・クララ修道院へも行き、同じような状況で司祭に出会い、危険を伴うので内部への付き添いを頼んだ。なぜなら、この修道院は規模が大きく、聖俗合わせてほほ千人を擁し、被災者に緊急の救助を必要とするが、司祭の協力なくしては実行できぬと感じたからで

ある。瓦礫の覆う遠路に疲れて、農園と所有地に戻ると、飼育場ではこの異変でもひとつとして錯乱した馬や騾馬はなかった。小鳥たちも同じ様子で、きわめて小さな生きものにも神の愛が宿ることを感じる。神意なくしては余も博愛的な行為を続け、各地へ迅速に移動して、緊急の要務を遂行できなかったであろう。余は一組の馬と騾馬を用意して、鞍に乗り、従僕ひとりに従えて、荒墟を踏破す難行を果たした。

通れぬ街路を越え、倒壊した屋根や門柱やバルコニー、さらには家具の残骸を避けつつ、宮殿に辿り着く。中庭での門が開いており、そこで出会った國務尚書ディエゴ・デ・エスレス閣下は、「まさかあなたが！」と驚愕の様子を示された。なかに踏み入るのも難渋であるが、安泰であられる副王殿下を庭園で拝した。なお緊張のときが続いたが、神護により翌朝余震が止まり、救援への取り組みが可能となった。こうした状況に意を強くして、大祭長にして司教総代理であられるM・D・アンドレス・ヌニーヴェ様の救助に向かう。この方はリマの神託とも讃えられる崇敬すべき人物で、老いて病身であられるが、嬉しくも荒墟で家族とともに無事で居られ、余の支援を必要とされなかった。ラス・トレス伯爵（在スペイン）の邸宅へ赴くと、伯爵夫人もほかの家族も見当たらぬ。近隣の海軍大佐ジュアン・パプリスタ・ポネル閣下に尋ねて、ともに捜して頂くようお願いし、広場に避難する彼女らを確認した。ついで裁判所長官アルヴァロ・ボラノ閣下の行方を辿り、同じくムニーヴェ様の近くで見出した。こうして貴顕のご家族をいくつか能うかぎり支援して危険を防いだが、民衆の集団的な騷擾をとくに警戒し、混乱のすくない安全な場へ導いた。ヴィランヌエヴァ・デル・サト伯爵とパブロ・デ・ハヴィデ卿の両家を襲った最大の災厄について最後に報告する。両家は姻戚にあたり、サト伯爵夫人はパブロ卿の叔母であり、ともに伯爵の邸宅に居られた。地震発生するとき在宅し、街路へ逃げて瓦礫に埋もれたのである。パブロ卿の父、母、妹はともに死亡し、伯爵夫人は幸いにも死を免

れ、ミカエラ様は脚部を負傷、ジョゼファ様は無傷にして、その他三名も致命傷を受けた。これらふたりの女性性はパブロ卿の妹君であって、彼女らの優雅さと才知でこの大家族は有名である。パブロ卿の気概よってかかる悲劇もやや緩和され、彼の配慮によつて幾人か命を救われる。余が持参した霊水、ハンガリー王妃の水もこうした救命に役立った。医薬品と聴聞司祭が肝要であるため、あちこちで探し求めたものの、徒勞に終わる。どこでも必要とされるが、医局などは消えてしまった。再度王宮へ行き、随伴の護衛を頼むが、ひとりの兵士すら確保できぬ。これをお願いすべく、副王殿下への拝謁を懇請したが、不可能であった。この場でふたたび國務尚書とお会いする。こうした奔走を終えたのは黎明近くであつて、自分の願いが無益とされるのに落胆し、いまだその責務を認められず、緊急政策の発令によつてのみこの大都市で遂行できると困惑した。僅かな時間に起きたこれほどの惨事は未曾有と言える。

震動のたびに神に慈悲を乞う叫びと悲しみの号泣が交又し、負傷者の訴えとより深刻な被害が錯綜して區別できない。あるいは生き埋めとなり、あるいは下敷きとなった人々は、洞窟に籠められた最後の瞬間のように救助を求め、多くは死亡する。ある女性はそうした状態を胸に抱き続け、三日後も母子ともに生きていた。震動に先立って地下の噪音は聞え、大地が割れるかに思われ、そこまでは至らぬものの、轟きの変動と継続に恐怖が募る。翌二九日リマの市街にさらなる恐慌状態が広がった。死せる者、傷ついた者、無事な者が荒墟や広場に密集するなかで、数多くの布教師は命を救うため神の奇蹟を口にするのみである。絶大な惨状のなかで彼らがみずから救援に協力せぬことを、余は心外に思い、義憤すら覚えた。彼らの対処は

各人に気やすめとなるにすぎず、实际的でない。①

〔オバンド侯爵の震災書簡 その二〕

災厄は頂点に達したと信じたものの、そうではなかった。正午頃カヤオから数名が到着して、当地における極度の惨状を急報し、余らは慰撫すべき言葉を失った。前述のごとく二八日午後十時半にリマで地震が発生した半時間あと、カヤオ北東を激烈な津波が襲って、四箇の巨大な錨を断ち切って、港に停泊する船舶をば要塞に押し上げ、南東へ大砲の射程距離まで浮動させる。船舶の一艘は広場入口まで流され、他の一艘はそこへの小麦を積んでいた。停泊中の船舶には備砲三十門のフリゲート艦、サン・フェルミン・ゲラ号も停泊中であって、チリの任務を終えた余が、帰国の際乗船したのはまさにこの船舶である。幾人かの水兵はそれを護衛していた。フリゲート艦が陸へ押し上げられるや、彼らは船から脱し、事態を急報すべく余のもとへ駆けつける。配属将校ジェイム・デ・サン・ジュスト殿を使者としてただちにそれを副王殿下に報告した。激烈な津波は要塞や建物や神殿の基盤を破壊して流失させ、跡には煉瓦の舗装が残るのみであった。要塞に備わる大砲二四もこれに直撃されて、口径が四方に流され、いかなる部分も発見できない。慎重な算定によっても五千人の死亡と数えられ、防壁の低さによって三十カ所が破壊された。しかし、こうした異変は数え切れない。余は現地に赴いてこれらを確認し、救援したあらゆる荒墟でかくも膨大な男女の遺体が、人

① Obande, *op. cit.*, pp.239-244.

間の理性では思いも及ばぬほど無惨に累積するのを、慄然として凝視した。自身についてもあらゆる家具や書記官から頂いた銀食器を喪失して、自宅の敷地すら確認できず、食卓をはじめいかなる痕跡もない。

三十日には午後四時までリマで力を尽し、拙宅のもっとも貴重な家財を掘り起すとともに、物資払底の緊急支援に役立てるべく、衣服や装具、さらには貯蔵庫の食糧捜し出した。(老若の男女二百名以上が避難する)わが農園へ、やがて凄まじい表情の黒人が騎馬で乗り入れ、「リマに津波が迫り、ただちに丘陵へ全員避難せよ!」と瓦礫のなかで怒号した。遠方でもその大声と黒人の様子でも判ったほどである。彼の喘着と悪意を見抜いた余は、避難者の悲痛な叫喚を煽り、恐怖と混乱を倍加するのを懸念して、能う限りの保護を約束・実行し、指示せぬかぎり軽率に移動しないよう命じた。かくしてほぼ恐慌状態は鎮まり、家畜の保存にも配慮する。伝道師にして余の司祭であるフランシスコ会士フライ・クリストヴァル・デ・ショーヴェス神父がそこへ来駕されて、事件の経緯も調査され、度し難い黒人は逮捕された。みずからの家族と避難の人たちを落ち着せて、余らはふたたび公衆の救済に向かった。津波に襲われた港湾で困苦する人々は、医薬も持たず、方途も判らない。救援を美事に果たしたのは数千名に及ぶ修道女たちであった、この際外出禁止が解除され、若干の修道院はこじ開けられて、閉じ籠もる女はなかった。こうした恐慌状態のさなか副王閣下は余らに謁見を許され、リマへの津波について風評の根拠を否定された。とはいえ、混乱のなかで閣下は恐怖への性急な対応をたんに喚起され、災厄の渦中にある人々の祈祷の行事を奨励するのみであった。この営みを主導するのが俗人には難しく、その労を執られたクナーベ神父は、効果あらしめる迅速を要するとまず副王陛下に進言したが、すでに時遅く、無数の住民が首都から脱走していた。

三十日には午後四時までリマで力を尽し、拙宅のもっとも貴重な家財を掘り起すとともに、物資払底の

緊急支援に役立てるべく、衣服や装具、さらには貯蔵庫の食糧捜し出した。(老若の男女二百名以上が避難する) わが農園へ、やがて凄まじい表情の黒人が騎馬で乗り入れ、「リマに津波が迫り、ただちに丘陵へ全員避難せよ！」と瓦礫のなかで怒号した。遠方でもその大声と黒人の様子でも判ったほどである。彼の瞞着と悪意を見抜いた余は、避難者の悲痛な叫喚を煽り、恐怖と混乱を倍加するのを懸念して、能う限りの保護を約束・実行し、指示せぬかぎり軽率に移動しないよう命じた。かくしてほぼ恐慌状態は鎮まり、家畜の保存にも配慮する。伝道師にして余の司祭であるフランシスコ会士フライ・クリストヴァル・デ・シヨーヴェス神父がそこへ来駕されて、事件の経緯も調査され、度し難い黒人は逮捕された。みずからの家族と避難の人たちを落ち着せて、余らはふたたび公衆の救済に向かった。津波に襲われた港湾で困苦する人々は、医薬も持たず、方途も判らない。救援を美事に果たしたのは数千名に及ぶ修道女たちであった、この際外出禁止が解除され、若千の修道院はこじ開けられて、閉じ籠もる女はなかった。こうした恐慌状態のさなか副王閣下は余らに謁見を許され、リマへの津波について風評の根拠を否定された。とはいえ、混乱のなかで閣下は恐怖への性急な対応をたんに喚起され、災厄の渦中にある人々の祈祷の行事を奨励するのみであった。この営みを主導するのが俗人には難しく、その労を執られたクナーベ神父は、効果あらしめる迅速を要するとまず副王陛下に進言したが、すでに時遅く、無数の住民が首都から逃れつつあった。急速余は丘陵地帯へ出勤し、逃散をやめるよう大声で説得し、その大半を引き止めた。津波が退くのを見たか、彼らは余に確かめる。相違ない、と応じたが、偽りも方便である。教区全域にわたりあらゆる年齢と身分の女性を襲った惨状は表現に尽し難い。なぜなら、やや氣力を取り戻しながら、どこに位置するかも判らず、持てるものをだれもがすべて失って、疲労と衰弱を重ね、日の暮れるなかで憔悴の淵にいる。丁度その頃風体のよくない男がひとり

りの修道女を馬上に同乗させ、拉致したとの通報があった。余はただちにそれを追ったが、徒勞であった。

夜が更け、行方は掴めず、疲れた騎馬で帰路にも迷った。①